

第 164 回貴重書展示

祈りのかたち—精霊祭によせて— 略解題

令和 7 年 7 月 1 日（火）～ 7 月 31 日（木）

月曜より金曜 8 時 50 分～ 21 時

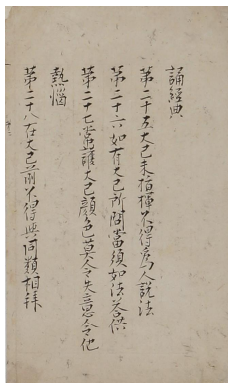
土曜 8 時 50 分～ 18 時

* 「海の日」（7 月 21 日、月曜）は開館します
（8 時 50 分～ 21 時）

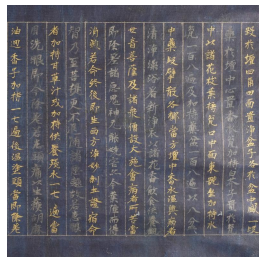
会場 鶴見大学図書館エントランスホール

ギャラリートーク（図書館地下ホール）

7 月 26 日（土）14 時より約 30 分／予約不要



- | | |
|-------|---------|
| 第 1 部 | 風格の奈良時代 |
| 第 2 部 | 優美の平安時代 |
| 第 3 部 | 思索の鎌倉時代 |



鶴見大学図書館

ごあいさつ

お盆の季節となりました。大本山總持寺では精霊祭が行われます。ゆかりの人を想い、深遠な哲理にふれるよい機会です。

さて本学には、和漢洋の優れた古典籍を所蔵する図書館があり、仏教関係の貴重書も数多く集められています。今回は時の流れに従い並べてみましたが、仏典は多種多彩、とても全貌を表すことはできません。各時代の特色を、その一端なりとも感じ取っていただければ、幸いです。

令和乙巳涼月上浣 鶴見大学図書館

*展示充実のために、本学関係者から古典籍若干をお借りしました。
函架番号のない書目がそれです。ご協力に感謝します。

展示書目

第1部 風格の奈良時代

- 1 百万塔(付 自心印陀羅尼 1 卷) 神護景雲4年(770)以前制作 1基
〔185・581 H 1373667〕
 - 2 大般若經 卷176～180 奈良時代写 永恩具經 卷子本5軸
〔183・2 D 0317733～0317737〕 横浜市指定文化財
 - 3 大般若經 卷190断簡 神護景雲元年(767)行信発願 台紙貼り1紙
(法隆寺虫喰經) 〔183. 2 D 1396190〕
 - 4 賢愚經 卷3 鋸陀身施品断簡 奈良時代写 伝聖武天皇筆
大聖武 1紙 (古筆手鑑巻頭) 〔728・8 K 1327011〕
 - 5 賢愚經 卷9善事太子入海品断簡 奈良時代写 伝聖武天皇筆
大聖武 1紙 額装1紙 〔183. 19 K 1080898〕
- (参考) 四分律断簡 奈良時代写 伝朝野魚養筆 1紙

第2部 優美の平安時代

- 1 称讃浄土仏摂受經断簡 平安時代初期写 伝中将姫筆 台紙貼り1紙
〔183・5 S 1396193〕
- 2 華嚴經断簡 平安時代後期写 藍地金界經 台紙貼り1紙
(泉福寺焼經)
- 3 陰持入經 卷下断簡 平安時代後期写 金銀交書經 軸装1紙
〔183 K 1080899〕
- 4 不空羼索神變真言經 卷28 平安時代後期写 金銀交書經
軸装1紙 〔183 C 1191144〕

- 5 大般若經 卷39 承安4年(1174)善恵房連円写 折本1冊
〔183 C 1077372〕

(参考) 妙法蓮華經釈文断簡 伝後白河天皇筆 金銀交書經
台紙貼り1紙

第3部 思索の鎌倉時代

- 1 観普賢經私記 建保5年(1217)禅寂写 列帖装1冊
〔183・2 D 1077372〕
- 2 大般若經 卷285 東大寺八幡經 嘉禄2年(1225)～安貞2年(1228)写 卷子本1軸〔183・2 D 0156157〕 横浜市指定文化財
- 3 対大己五夏闍梨法断簡 道元禅師自筆 道正庵切
寛元2年(1244)写 額装1面〔188・86 D C 313196〕
- 4 金剛頂大王經疏断簡 卷1抄出 鎌倉時代前期写 伝解脱上人筆
〔183・7 K 1396196〕
- 5 三宝感応要略録断簡 卷下僧宝聚 鎌倉時代前期写 伝解脱上人筆
- 6 孟蘭盆經疏科分 鎌倉時代刊 泉涌寺版 折本1冊
〔183・6 G 10535497〕
- 7 如意輪菩薩念誦法 鎌倉時代末期写 高雄寂静坊旧蔵 粘葉装1冊
〔183・7 G 1174243〕

略解題

第 1 部 風格の奈良時代

決して派手ではありませんが料紙は極めて良質、その上に一点一画おろそかにしない謹厳雄渾の書を展開しています。千年の時を悠々と超える端正さと風格が、奈良時代写経の特徴です。

1 百万塔（付 自心印陀羅尼 1 卷） 神護景雲 4 年（770）以前制作 1 基〔185・581H 1373667〕

世界最古の印刷物として高く評価されてきた、奈良時代文化の記念碑的遺産。近年仏国寺（韓国）において発見された『無垢浄光大陀羅尼經』が8世紀前半の制作であるならば——異説もある——、この百万塔に先行する。また敦煌出土・大英博物館所蔵の『金剛般若波羅蜜多經』は「咸通九年四月十五日王玠為 二親敬造普施」の刊記を持ち、有記年の出版物（dated printed book）としては当該咸通9年（868）版経が最も古い。

しかしながら現在までの伝来経路が明確であり、また出版諸事情が歴史文献によって検証可能な点をも勘案するならば、刊行時期の特定出来る最古の印刷物としてのその価値は、強調しても強調しすぎることはあるまい。なお塔中に陀羅尼を納めるのは、『無垢浄光大陀羅尼經』が説くところの招福除災後世安穩の効果を期待したことによる。

さてよく知られた『続日本紀』宝龜元年（神護景雲4年、770）4月26日条には「八年乱平、乃発弘願、令造三重小塔一百万基、高各四寸五分、基径三寸五分、露盤之下各置根本・慈心・相輪・六度等陀羅尼、至是功畢、分置諸寺」と見え、天平宝字8年（764）に恵美押勝の反乱（八年乱）が起こり、その鎮圧後称徳天皇の発願によって制作が始まった、と記録する。塔の法量を示す数値の「高各四寸五分」は相輪部分を除いた塔身に対応し、「基径三寸五分」も正確である。ところが陀羅尼4種の内、「慈心」は典拠たる『無垢浄光大陀羅尼經』の「自心印」とも百万塔に納められた陀羅尼の実物「自心印陀羅尼」とも相違し、法量の数値が正確なだけに、『続日本紀』の誤りと片付けることには躊躇される。『続日本紀』の古い伝本を引用した可能性のある『日本紀略』当該条には「根本・置心・相輪・六度」と記録され、やはり「自心」の箇所に異同を見る（興福寺一乗院旧蔵本による。諸本一致）。明快な答を用意出来ていないけれども、単なる誤りとは断定し得ない問題が伏在しているのではないか。

小塔以外に、節目ごとの一万基塔・十万基塔が作られた。それらは「諸寺」に「分置」されたが、1,000,000 基の塔も現在法隆寺所蔵の約 40,000 基存するのみ。法隆寺以外の諸家分蔵百万塔——本学図書館所蔵分も含む——は、明治41年（1908）寺門維持のために基金施納者への譲与対象とした1,400基であるが、それ以前に若干数の流出を見ている。歴史的遺物として早くから知られ、川路聖謨（1801～1868）によれば、「聖徳太子の百万塔」とも呼ばれて古い木材を用いた贋作が江戸時代末期には存しており、既に収集の対象として珍重されるものであったことが判明する（『寧府紀事』弘化4年正月19日条）。

使用料紙・印刷技法（木版か金属版か）・版の種類・塔身制作技術など論点は多数、研究も盛

んに行われている中では、自然科学的・技術的知見を中心に構成した『百万塔陀羅尼の研究』が有益である。以下、目視の結果を私見として掲げる。

イ 塔身部

ヒノキ材を柂目取りし轆轤挽きした 3 層塔(高さ 13・1 糎、底面径 10・4 糎)。白土化粧がよく残り全体として保存良好だが、第 1・第 3 層に小破損あり。塔上面中央に円孔(径 2・2 糎)を穿ち、陀羅尼の収容と相輪固定の機能を持たせる。底面に墨書あるも薄れて判読困難。制作年月日か制作担当者が記されていたと推される。

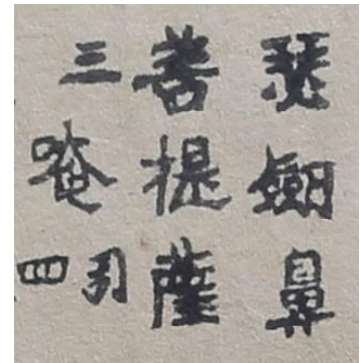
ロ 相輪部

桜かと思われる緻密な材(高さ 8・2 糎、最大径 3・5 糎)を用いるのは、塔身より繊細な加工を必要とするゆえである。桂材との意見もあるので、木材の専門家にご調査願いたい。塔身と同じく白土化粧を施す。相輪の各部分をどのように把握するかは難しい問題であり、一応露盤・伏鉢・宝輪(大小 7 層)・宝珠と見ておく。底面の墨書は薄れて判読困難。

ハ 陀羅尼

厚手緒紙を黄蘗染めした本紙(縦 5・5 糎、横 39・6 糎)巻頭に簾目の強い緒紙(縦 5・5 糎、横 6・1 糎)を糊付けし、表紙の意味を持たせる。巻末余白を意図的に細く巻いているのも、卷子本としての体裁を整えるためであろう。表紙相当部分にわずかの虫損が見られる。

4 種 9 版の内、自心印陀羅尼短版を刷り納める。すべての版いずれも 1 行 5 字、書風は一見素朴ながら力のある個性的な結構となっており、奇古簡勁にして極めて味わい深い。実見した印象では、金属版ではなく木版による印刷と推される。



内容について、いくつかの疑問点を記す。

- 1) 典拠である『無垢浄光大陀羅尼経』と百万塔陀羅尼に「自心印」とあるにもかかわらず、『続日本紀』・『日本紀略』に各々「慈心印」・「置心印」と表記されること。
- 2) 百万塔陀羅尼の内題は「根本陀羅尼」・「相輪陀羅尼」・「自心印陀羅尼」・「六度陀羅尼」であるが、『無垢浄光大陀羅尼経』に説く「根本陀羅尼」・「相輪櫟中陀羅尼」・「修造佛塔陀羅尼」・「自心印陀羅尼」・「大呪王陀羅尼」・「六波羅蜜陀羅尼」との名称の不一致及び 6 種陀羅尼から 4 種を選んだ理由。後者については「六種陀羅尼中書写納置すべき」4 種を刷った(『仏書解説大辞典』無垢浄光大陀羅尼経)が分かりやすい説明ではあるが、「六度陀羅尼」(六波羅蜜陀羅尼)は「書写納置」の対象となっていない。6 種全部印刷されたとの説(湯浅吉美「百万塔の思想的背景」=『埼玉学園大学紀要』5)も出されている。おもしろい意見ではあるけれども、何より「修造佛塔陀羅尼」・「大呪王陀羅尼」の実物が現在まで見つかっていない点、立論の障害となろう。
- 3) 4 種の陀羅尼すべてに大正蔵経所収本と異同がある。自心印陀羅尼の場合、異体字を除き実質的な差異を見ると、「伐囉拏」の夾注「上声」(百万塔陀羅尼)を「去声」(大正蔵経)に、「毗布麗昵末麗八」(百万塔陀羅尼)を「毗布麗八昵末麗」(大正蔵経)に、「訶引」(百万塔陀羅尼)を「訶引十三」(大正蔵経)に作ること。これらの異同が教学上どのような意味を持つのか、専門家にお調べ願いたい。

ホ 付属資料

1) 印籠蓋木箱(縦横 15・0 糎、高さ 24・3 糎) 1 個。蓋表に「百萬塔之一」と墨書、底面に「鵜寺倉印」の朱印を押す。譲渡当時の姿を留めて貴重。

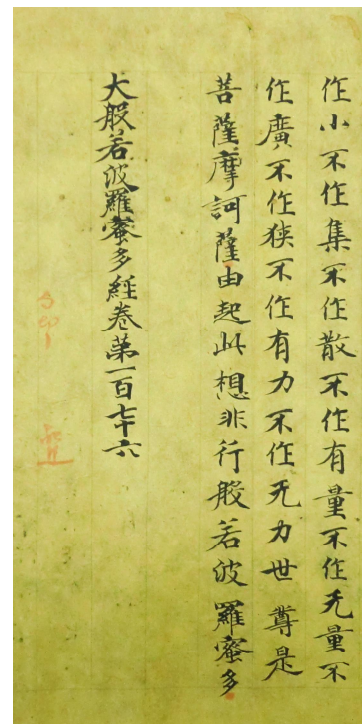
2) 譲渡証書 1 通。明治 41 年 6 月 15 日付、山崎文次宛。譲渡金額は 15 円であり、譲渡された 1,400 基は保存状態によって 4 種に分けられており、15 円は状態の良くない第 4 種に属する。なお山崎文次氏は明治 17 年(1884)生まれ、愛知県の大地主ながら大高銀行・名古屋製氷株式会社等の重役を勤めた実業界の人でもあった(大正 2 年『大日本人物誌』)。

2 大般若経 卷176~180 永恩具経 卷子本5軸 奈良時代写 〔183・2D 0317733~0317737〕 横浜市指定文化財

新補の桜皮色無地紙表紙(縦 25・3 糎、横 17・0 糎)に濃紫の平紐を付す。外題なし。見返しに装飾なく、打紙加工を施し淡墨界(界高 19・7 糎、界幅 1・8 糎)を引いた黄蘗染め楮紙(幅約 48 糎)本文を継ぐ。紫檀撥形軸は補修時の制作。奈良時代特有の遒勁な写経体による 1 行 17 字の定式書写、朱点あり。虫損は本文料紙と類似の楮紙を用いて補修済み。元来卷子本として調製されたが、飜読の便を重んじたゆえか一時期毎半葉 5 行の折本に改装、修復に際し原態へ戻されている。各巻の法量は 782・3 糎(巻 176)、887・4 糎(巻 177)、884・1 糎(巻 178)、939・3 糎(巻 179)、841・7 糎(巻 180)であり、5 巻連続して伝存する点に高い価値が認められる。

展示の『大般若経』は興福寺蔵司永恩(1167~?)が収集して 1 具とし、氏神たる河内国玉祖神社に奉納したものであり、収集奉納者の名を取って「永恩具経」と呼ぶ。僚巻には「天平二歳庚午三月上旬…都菩提臣足島」(巻 518)・「天平二年歳次庚午三月上旬…黄君満侶奉」(巻 522)・「天平十三年五月廿四日橘戸祢麻呂願経」(巻 573・577)等の奥書を持つものがある。また書風や料紙の特色からも、永恩が収集した経巻は、奈良時代前半から平安時代初期にいたる大般若経であったことになる(田中塊堂『日本古写経綜鑑』摘要)。伝来の過程で徐々に流出、明治の神仏分離令によって決定的に散逸した。

展示の 5 巻は奈良時代後半の書写と見られ、巻 176 より巻 179 まで巻末に「句切了 永恩」の簡略な加点奥書が存する。巻 180 では「天福元年癸巳五月廿五日上偕(階?)馬道以東／為第二房句切了 永恩生年六十七」とやや詳しく記すので、10 巻ごとに長めの奥書を付すのが原則であったか。大般若経の取り合わせは貞永元年(1232)に行われたとする説(『日本古典籍書誌学辞典』永恩経の項)があるけれども、天福元年(1233)の奥書により否定される。天福元年奥書が巻 180 に見られるところから憶測すれば、これ以降の巻の中には、さらに下った時期の集成に相当するものがある。また永恩朱書に見える興福寺の「上偕(階?)馬道以東／為第二房」については、京都立本寺蔵藍紙『法華経』(重要文化財)奥書の「於興福寺上階馬道以西第十六房」がよく似ており、今後詮索の資となろう。

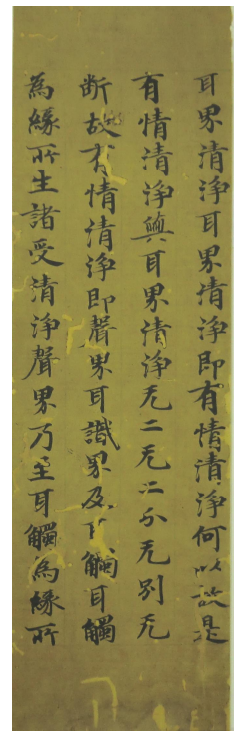


なお第1部1百万塔(付 自心印陀羅尼 1 卷)にも引用した『寧府紀事』には「きのふは大般若經一卷を買たり、書至てよろし、天平宝字六年のもの也、奥書にあり、可疑ものにあらず、末に朱書あり、貞永とあり、最妙寺(最明寺か)ころの朱書也、あまりによし、壺石ぶみの肉筆みたくても見られず、よつて買求たり」(嘉永元年 6 月 17 日)の文言があり、ここに記された大般若經 1 巻はまさしく永恩具經に該当する。川路聖謨は「壺の石ぶみ」を多賀城碑のことと考えていたらしい。多賀城碑には「天平宝字六年十二月一日」の年紀が刻まれている。

3 大般若經 卷190断簡 神護景雲元年(767)行信発願 台紙貼り1紙 (法隆寺虫喰經) [183. 2 D 1396190]

黄蘗染め楮の打紙(縦26・0糎、横7・8糎)に淡墨界(界高 20・3 糎、界幅 1・8 糎) 4 行を引く。料紙表面に瑩紙加工を施したか。法隆寺僧行信(? ~ 750 ?)の神護景雲元年(767) 9 月 5 日発願に始まり、弟子孝仁に引き継がれた写經事業によって『法華經』『華嚴經』『大般若經』『瑜迦師地論』等 2,700 余巻が制作され、法隆寺に収まった。掲出の断簡はその内『大般若經』巻 190 初分難信解品の一部分である。行信は聖徳太子自筆とされる『法華義疏』を法隆寺に献じた僧(『法隆寺縁起資材帳』別本)。写經事業の概略は願文の「大法師諱行信、平生之日至心発願・・・弟子孝仁等不勝風樹之傷、敬弁先願・・・神護景雲元年六月九月五日敬奉写畢」の文言から判明する。

掲出断簡の書風は謹厳端正、かつ優美な趣も有しており、極札に似た付属の小紙片に「法隆寺虫喰經 天平時代写 行信僧都発願經」と記される。これは京都芸林莊先代真門孝雄氏の手であり、真門氏は古写經に詳しく収集品も多かった。法隆寺伝来の名品かどうか確証はないが、ひとまず芸林莊先代の鑑識眼を信用しておく。書風・紙質・書写様式等は、明らかに奈良時代の特徴を備えている。なお古い内典の多くは虫害を蒙っているが、特に神護景雲經を「虫喰い經」と呼んで称揚しているのは、行信の篤志もさることながら、法隆寺伝来の筋の良さと写經体の見事さに魅了されるからであろう。ちなみに、虫損は概ね後代の補修に起因する。すなわち補修に用いられた糊を虫(シバンムシ)が好んだ結果である。



4 賢愚經 卷3 鋸陀身施品断簡 伝聖武天皇筆 大聖武 1紙 (古筆手鑑卷頭) 奈良時代写 [728・8 K 1327011]

具引き厚手料紙(縦 27・5 糎、横 7・6 糎)に淡墨界を施し、威風堂々の大字が圧倒的迫力を示す奈良時代の代表的写經。1 行 17 字の定式によることなく、12 字のゆったりとした書きぶりである。書写内容の『賢愚經』は 13 巻・15 巻・16 巻・17 巻と幾種類かの伝本があり、展示の切は 17 巻本巻 3 鋸陀身施品を 3 行に写す。松煙の濃墨が文字の雄渾遒勁を一層引き立てており、手鑑劈頭を飾るのにふさわしい名品と言えよう。粉末状物質の見られる特殊な料紙は、香末もしくは仏舍利を漉き込んだと言われ茶毘紙の称もあるけれども、マユミの靱皮を用いて漉いた時に生じる樹脂の凝固体である可能性が指摘されている。これに従えば特異な書風と大字が特徴の『賢愚經』を唐写經とすることは出来ず、本朝の作例と見るのが妥当。なお書道史家の指摘

では、文字にかなりの補筆が存し、一旦写した後に筆を入れて字形を整えたとされ、これが通説のように受け止められている。しかし墨の流れ方・光沢・書写年代等から判断して、大聖武は明らかに松煙墨を以て書かれており、堅いもしくは明るい色調の料紙を用いた場合、墨量の多寡によって濃淡が強調され、一見補筆のごとく感じられる事象は決して珍しくない。これは松煙墨の特徴の一つである。さらに詳しく知りたいと思われる奇特な方は、愚文「松のけぶり一墨から切へ一」（『文献学の栞』Ⅲ）に就かれない。また明るく白味の強い料紙と暗い色調の料紙とで文字の見え方がどの程度異なるかを知るためには、2種の料紙を併置する資料が望ましく、白鶴美術館蔵手鑑巻頭の大聖武は好例の一つであろう。

大聖武は写経の王者として、また良質の手鑑巻頭に置かれる名品として、高く評価されてきた。『新撰古筆名葉集』聖武天皇の項に「大和切 大字 カラ紙胡粉地経、墨卦墨字、大聖武ト云、紙白・浅黄・茶・ウス紅等アリ」と著録されて名高い。古筆切愛好熱は安土桃山時代から江戸時代にかけて大いに高まり、この時期に多数の典籍が分割された。この大聖武はそれ以前より既に重んじられており、分割離散も早い。「英海送書状、聖武天皇宸翰三行（夾注「賢愚経云々」）」（『実隆公記』永正6年6月26日）は最も古い記録か。前田尊経閣本奥書によれば、東大寺戒壇院に伝来した聖教である。

5 賢愚経 卷9善事太子入海品断簡 伝聖武天皇筆 大聖武 1紙 額装1紙 [183. 19 K 1080898] 奈良時代写

特異な具引き厚手料紙（縦 27・4 糎、横 7・9 糎）に 3 行書写、墨の流れと虫損が存するのは惜しまれる。1 行目の欠損部分は「喪父」。その他の事項については第1部4賢愚経卷3鋸陀身施品断簡を参照。

（参考） 四分律断簡 伝朝野魚養筆 奈良時代写 1紙

麻もしくは楮の打紙（縦 25・2 糎、横 9・3 糎）を黄蘗染めとし、淡墨界（界高 23・0 糎、界幅 2・4 糎）を施す。一般の奈良時代写経より大字かつ雄渾、『四分律』卷 15 初文を書写する。波逸提（比較的軽い戒律違反）について記した個所である。正式の極札はなく、小紙片に「魚養真筆」と墨書し紙背に貼る。朝野魚養（?～787～?）は奈良時代末期から平安時代初期にかけての伝説的能書家で、弘法大師（774～835）の師とも称される。展示の断簡は魚養よりさらに古い時期の名筆。界線の細く厳しいところも鑑賞に値しよう。一般に、界線を引く技量が極めて高いことも奈良時代写経の特色である。魚養を伝称筆者とする古写経切は、概ね適勁な大字となっている。

第2部 優美の平安時代

平安時代になると謹直道勁の書体から穏やかな和様に変化し、料紙にも美しい装飾を加えた作例が多く残るようになります。貴族的な趣味を感じさせ、また親しみやすい表情の仏書です。

1 称讃浄土仏摂受経断簡 伝中将姫筆 当麻切 台紙貼り1紙 平安時代初期 [183・5S 1396193]

楮の打紙(縦 25・4 糎、横 5・9 糎)を黄蘗染めし、淡墨界(界高 20・0 糎、界幅 2・0 糎) 3 行書写。紙背に「中将姫 当麻切」と記した紙片を貼り、古筆了任の極札「中将姫 大千世界〔守村〕」が付属する。内容は『称讃浄土仏摂受経』であり、『新撰古筆名葉集』中将姫の項に「当麻切 黄紙墨書称赞浄土経」と著録される名物切に相当する。当麻切には筆跡を異にする切が幾種もあり、掲出の断簡は手鑑『藻塩草』(国宝、京都国立博物館蔵)所収の切とツレであろう。

伝称筆者中将姫は横佩大臣の娘とされ、『当麻曼荼羅縁起』では天平宝字 7 年(763)出家、法如尼と号し蓮糸の曼荼羅を織り上げた後、宝亀 6 年(775)極楽往生したと伝える。当麻切は奈良時代の書写とされることが多いけれども、写経生の筆跡ではなくまたその調製年代も平安時代初期まで下るのではないか。

2 華嚴経断簡 藍地金界経 台紙貼り1紙(泉福寺焼経) 平安時代後期写

藍色染料紙(斐紙か、縦約 19・5 糎、横約 11・0 糎)に金界(界間約 1・8 糎)を引き、金揉箔を散らす。藍色に染めた料紙をほぐし紙料と混ぜて漉き直しており、その結果淡く品の良い色調に仕上がっている。僚巻には巻頭に「泉福寺」の朱印を押すものがあり、河内国南河内郡大保村に存した泉福寺の旧蔵であろう。伝来の詳細は不明、第二次大戦後完全に散逸した。穏やかな和様の写経体によって 60 巻本『華嚴経』巻 26 十地品を写す。書風・料紙から 12 世紀始めの制作と見られ、数手による寄合書。ほぼすべての巻に焼損の痕跡があり、これによって「焼経」と呼ばれる。二月堂焼経と共に、火災を被った名品の例としてよく知られた装飾経。

展示の断簡は周囲の焼け焦げがかなり大きく痛々しいほどであるが、料紙の色合いや金箔装飾と相俟って、不思議な存在感を備えている。

3 陰持入経 卷下断簡 金銀交書経 軸装1紙 平安時代後期写 [183 K 1080899]

濃く紺色に染めた楮の打紙(縦 25・6 糎、横 12・4 糎)。銀界(界高 19・5 糎、界幅 1・7 糎)に 7 行書写。金 4 行銀 3 行の穏やかな和様の書風は平安時代後期の特色を示しており、金銀交書の贅沢な装飾経である。内容は『陰持入経』卷下、大正蔵経とは以下のような差がある。

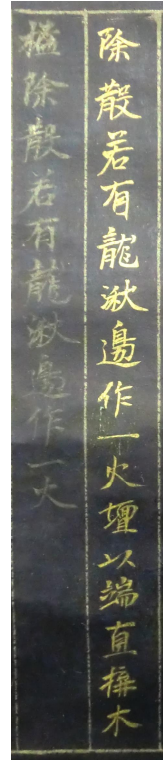
2 行目「念為思」(掲出断簡)↔「念思」(大正蔵経)・「命」(掲出断簡)↔「令」(大正蔵経)、3 行目「能」(掲出断簡)↔「態」(大正蔵経)、5 行目「行」(掲出断簡)↔「口(行構えに性)」(大正蔵経)と、わずか 7 行に 4 カ所の異同を見る。これら校異の評価については専門家にお任せするよりないけれども、書写年代が古いだけに有益な資料と言えよう。金銀交書経については、次項 4 不空羼索神変真言経巻 28 を参照。

4 不空羼索神変真言経 卷28 金銀交書経 軸装1紙 平安時代後期写 [183 C 1191144]

光沢のある紺紙(縦 25・6 糎、横 50・2 糎)に銀界(界高 19・3 糎、界幅 1・7 糎)を引き、金

銀泥にて交互に『不空羼索神變加持經』卷 28 清淨蓮華明王品第 67 を 27 行に写す。1 行 17 字の定式。種々の悩乱を香藥と加持とによって治癒する方法を述べた箇所であり、14 行目以下には石榴を用いた歯痛対処法が記される。料紙は楮の打紙を濃紺に染め、さらに瑩紙加工を施すので表面が平滑となり、かつては斐紙とも言われていた。銀界と銀字にやや薄れが見られるものの、金泥の燦爛たる輝きは失われていない。

青磁色素絹の天地・金茶地菊牡丹金欄の中廻し・銅魚子花文打ち出し軸の豪華な表具に仕立て、漆塗りと桐の二重箱に納める。桐の内箱蓋表に「紺帟金銀交書經中尊寺一切經断簡」、蓋裏に「浪華法眼塊堂〔英〕」と墨書する。古写經と古筆研究の権威にして仮名書道の大家でもあった田中塊堂（1896 ～ 1976）の箱書。ここに記された「中尊寺一切經」は、奥州藤原氏初代清衡の金銀一切經・基衡の金字千部法華經・秀衡の金字一切經の総称であり、いずれも紺紙に書かれており、金銀泥を交互に用いた作例は清衡の一切經に該当する。塊堂の鑑定も、掲出の金銀交書經が稀少であるゆえに著名な清衡一切經と結びつけた結果であろう。しかしながら奈良時代以来金銀泥交書經の作例が存し、中尊寺經とは断定しがたい。書風・料紙の特色等から平安時代後期の贅沢な写經と見られるが、中尊寺經とは別物か。



本文を検するに、大正新修大藏經との間に「和蘇加持」（掲出断簡）⇔「和酥加持」（大正藏經）、「加持一百遍」（掲出断簡）⇔「加持一七遍」など（大正藏經）はいくつかの異同があるけれども、最も注目すべきは最終行「□除散若有龍湫邊作一火」までで止まっており、以下 6 字文の余白となっている点である。この「除散若有龍湫邊作一火」は前行「除散若有龍湫邊作一火壇」とほぼ重なるので、目移りによる誤写を生じそれに気づいて書きさした、と考えるのが合理的か。もしそうであれば、成巻に至らなかった 1 紙の伝存例として極めて希な、したがって貴重な作と言えよう。

5 大般若經 卷39 承安4年(1174)善恵房連円写 折本1冊 〔183・2D 1077372〕

簾目の強い赤香色紙表紙（縦 25・0 糎、横 11・2 糎）中央に墨書外題「大般若波羅蜜多經卷第三十九」。本文は楮の打紙だが加工の程度は軽く、これを淡紅色に染める。每半葉 6 行の淡墨界（界高 19・8 糎、界幅 1・9 糎）を引き、1 行 17 字の定式に書写する。墨付 42 折。原態は卷子本であり、翻読便宜のために折本へ改装された。このような卷子本→折本の例はかなり多い。第 5 折裏と第 8 折表に 1 行の空白が見られ、紙を継いでから書写したのではなく、書写後装丁した結果か。ゆったりと穏やかな書風で写されており、僅か 50 年ほどを隔てた鎌倉時代の第 3 部 2 大般若經 東大寺八幡經の力強い字体とはかなりの対照をなす。

卷末に「承安四年甲午十二月施主西宮結縁御經大勸進得田住連円／善恵房為現在悲母現世安穩後世生善処一部内一〇書写」とあり、承安 4 年（1174）善恵房連円の手になるものと判明する。連円の伝記未勘。

（参考） 妙法蓮華經釈文断簡 伝後白河天皇筆 金銀交書經

台紙貼り1紙 平安時代後期写

楮の打紙を紺色に染め、銀界に金銀泥を用いて5行書写（縦25・6糎、横9・8糎）。各行には金泥梵字の書き入れがあり、通常種々の書き入れは研究または読誦のための書物に対して行われるので、装飾性の高い豪華な経典としてはとても珍しい。金銀交書経自体も作例が少ないのであるから、稀覯性の高さは言うまでもない。金銀交書経の代表的作例が中尊寺経であることについては**第2部4不空羼索神変真言経**の解題を参照。展示の断簡はおそらく中尊寺経とは別の蔵経から分かれたものと推される。

書写内容が完全に一致する内典を探し出せていないが、近い文言は『妙法蓮華経积文』卷下陀羅尼品に見られるので、しばらくこれを作品名としておく。もし逸名の仏書であれば極めて貴重、また『妙法蓮華経积文』の異本ならば校勘資料として非常に有益と言えよう。『妙法蓮華経积文』は法相宗の碩学仲算（中算とも）の撰述、平安時代法華教学の優れた達成を示す。

藤本了因（1626～1704）の極札「後白河法皇 四歴異反〔金山〕」が付属するけれどもその確証なく、また古筆名葉集の類にも著録を欠く。ツレ未見。伝称筆者後白河天皇（1127～1192）は源平合戦の動乱期をしたたかに生き抜いた帝王であり、多くの仏事を行い芸能にも大功を残す。展示の断簡は後白河天皇の筆跡とは異なるが、ほぼ同時期の書写であろう。

第3部 思索の鎌倉時代

源平の動乱を経て写経のありようも大きく変化し、形式にそれほどこだわらない行き方が主流となります。写経の文字は力強く、研学用資料においては特に個性的な書が数多く見られます。

1 観普賢経私記 建保5年(1217)禅寂写 列帖装1冊

〔183・3 E 1077371〕

雲母引き白茶地に褐色の唐草文様を刷った紙表紙（縦25・5糎、横15・8糎）。次第形に「観普賢経私記 如来蔵」と墨書する。冊子本仏書は通常粘葉装であるけれども、掲出本は列帖装となっており、比較的珍しい。大原来迎院如来蔵に伝わった内典は列帖装が多く、次第形の墨書とも整合する。表紙右下には「覚阿」の署名があり、承安元年（1171）宋に渡って禅を学んだ覚阿（1143～？）の手沢本と考えられる。掲出本の校合は建保5年（1217）であり、覚阿の署名に問題がなければ、最晩年74歳以降の入手となる。ただし後掲奥書のように掲出本は来迎院如来蔵の闕を補うために書写したものであるから、覚阿在世中——寛元元年（1243）を下ることあるまい——に如来蔵から流れ出ており、闕を補う目的は30年に満たずして破れたこととなる。もっとも覚阿なる僧は、入宋僧覚阿以外に鎌倉時代後期の泉涌寺にも律師として名が見えるので、表紙に署名を残した人物が誰であるのかは、さらなる考究を要する。

料紙は楮打紙と思われるがとは強い張りや透明度の高さから斐を交えた混漉きであろう。每半葉7行の白界（界高22・5糎、界幅1・8糎）を施し、1行21字前後に書写。墨付27丁。卷末

に遊紙 1 丁を置く。前後に「尾門」の朱印を押す。尾題「普賢經私記」の次に奥書 4 条があり、それぞれ以下の通り。

「一校了」(イ)・「本云／保元三年十月十日於白河御房手自書写之、此書慈覺／大師草云々、三井本也、書本文字狼藉歟、沙門澄憲卅三／建保五年八月十三日書校了 為補如来藏之闕也／沙門禪寂」(ロ)・「以正本重可比校」(ハ)・「或人云、此記慈覺大師記云々／私曰、広智菩薩奉借書籍於慈覺大師之目錄有／普賢經私記、若此記歟、可尋之 禪寂」(ニ)。

これらによれば、慈覺大師円仁(794～864)の撰述と伝えられる『観普賢經私記』(ニ)が書写され、これに建保5年(1217)8月、如来藏の闕を補うべく禪寂が校合、その対校本は保元3年(1158)澄憲書写の三井寺本であった(イ・ロ)。さらに由緒正しい本によって校合すべきであると言う(ハ)。禪寂(?～1216～?)は日野家の出身で鴨長明(1155～1216)と交流があり、長明没後回向のために月講式を行った。禪寂とその周辺については、池田利夫博士「鴨長明の大原と日野一禪寂伝に関する新資料管見」(『源氏物語回廊』第三篇)に詳しい。

2 大般若經 卷285 東大寺八幡經 嘉禄2年(1225)～安貞2年(1228)写 卷子本1軸〔183・2 D 0156157〕 横浜市指定文化財

掲出本は表紙を欠くが、僚卷の装丁によれば濃紺地に金銀箔蒔き表紙、見返しは銀箔蒔きの装飾を施す。本文 17 紙(縦 26・2 糎、全長 862・5 糎)に欠脱はなく、それぞれの紙背に「東大寺／八幡宮」の墨印を押す。軸木に薬師十二神将の梵字 17 字を記し、原装丁のままの撥形鍍金軸に付す。卷子本の仏典は飜読の便宜を図って折本に改装されることが多いけれども、東大寺八幡經は原態のまま伝来しているところにも大きな価値が認められる。料紙は黄蘗染め楮打紙と思われるが、張りのある紙質なので斐楮混漉きか。1 行 17 字の定式に書写。濃墨肉太の力強い写經体が中世の新風を感じさせ、鎌倉時代前期を代表する写經として評価が高い。全体に裏打補修を加えているため、紙背の墨印「東大寺／八幡宮」が見えづらくなっている。また補修後さらに虫害を被っている点が惜しまれる。第1部3大般若經(法隆寺虫喰經)断簡 も補修後に虫損が生じた例である。

僚卷の卷 1 に発願者「比丘尼成阿弥陀仏」の署名と「嘉禄二年丙戌四月廿五日己酉、於東大寺塔本房、第一卷書写了、大法師秀惠春秋八十七」の書写奥書があり、調製時期を知りうる。僚卷の奥書から安貞2年(1228)まで書写活動が行われたらしい。また經藏造営のために米・木材・銭等の寄進があったことを示す奥書が加えられる巻もあり、掲出本には書写奥書がなく「奉加錢百文、尼善阿弥陀仏」以下の寄進文言が見える。これは本文と別筆。

紙背の墨印・僚卷の書写奥書・寄進文言等から、当巻は「比丘尼成阿弥陀仏」により手向山八幡宮に奉納され明治初年まで護持されたが、神仏分離令以降流出。西大寺住持の元に300巻以上集められており、現在各機関や個人の所蔵となっている經卷は、ここからさらに散逸したのであろう。手向山八幡宮は天平勝宝元年(749)勸請、東大寺の鎮守八幡として尊崇された。

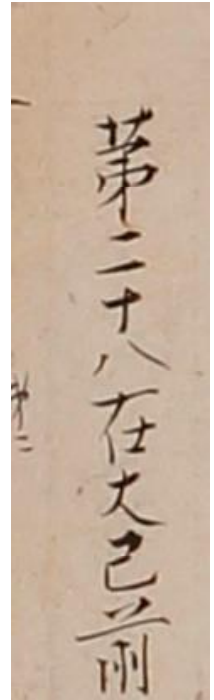
3 対大己五夏閼梨法断簡 道元禅師自筆 道正庵切

寛元2年(1244)写 額装1面〔188・86 D C 313196〕

丁寧な打紙加工され緻密な質感を持つ楮紙(縦 23・9 糎、横 14・4 糎)。白界 6 行(界高 18・0 糎、界幅 1・8 糎)を引き、鋭角的な厳しい書風で『対大己五夏閼梨法』(以下『対大己法』と

略称)内第 25 ～ 28 条を写す。『対大己法』は先輩僧侶すなわち「大己」に対する礼法を定めた道元禅師(1200 ～ 1253)撰『永平大清規』の 1 部であり、原態は 10 丁 20 面程度の粘葉装であったと考えられ、手鑑『藻塩草』(国宝、京都国立博物館蔵)に押された 1 葉の裏面に相当。手鑑『見ぬ世の友』(国宝、出光美術館蔵)には巻末奥書「于時寛元二年甲辰三月二十一日在越宇吉峯精舎示衆／道元〔花押〕」を持つ切が存し、年次を特定出来る。本学図書館には掲出断簡の他に第 60 ～ 62 条の 1 葉を蔵する。

掲出断簡は『新撰古筆名葉集』道元禅師の項に「道正庵切 四半白紙白卦正法眼蔵片カナ交リノ処モアリ」に相当、先に掲げた『見ぬ世の友』にも道正庵切と記した古筆家の付け札が存する。内容を『正法眼蔵』する点と「片カナ交リ」の切が存在しない点に問題が残るけれども、数少ない禅師自筆資料として価値が高い。切名に見える「道正庵」は、道元禅師と共に入宋した藤原隆英(? ～ 1248)の号道正に由来する。隆英は帰国後洛西木下に庵を結び、薬舗として代々富裕であった。以下『洞上聯燈録』巻 12 拾遺によると、「左金吾、叙三品」や「日国稻荷廟神」から薬を得た等の記事には信を置きたいが、父藤原顕盛、母源仲家女、清水谷公定の養子となり、貞応 2 年(1223)宋に渡る。道元禅師が病んだ時、神人より「神仙解毒法」を授けられ、子孫にその法を伝える。『京童』第 3 に「道正の町、道正の解毒丸は天下にかくれなき名薬なり、洞家の僧のつたへしとにや、子細は諸人の口につたはれり、今も禅僧の此家に入来といふ」と見え、また『花洛羽津根』3 にも「解毒丸 上の京木の下 道正庵法眼製」と記される老舗であった。



白界の打紙料紙・謹直な運筆から判断して、清書本と見られ、先に引いた「于時寛元二年甲辰三月二十一日・・・示衆」の字句から、寛元 2 年(1244)までには『対大己法』が成立していた。展示の断簡左端には上方に製本の目安となる短い墨線と「第二」の細字が残る。わずかな書き入れではあるけれども、この断簡が丁の裏面であること及び編目の順序が「第二」である可能性を示していて、とてもおもしろい。禅林の規律を定めた『永平大清規』は寛文 7 年(1667)版本が流布し、所収編目の順序が嘉禎 3 年(1237)の『典座教訓』・寛元 3 年(1245)成立と推される『弁道法』・寛元 4 年(1264)以降の述作とされる『赴粥飯法』・宝治 3 年(1249)の『吉祥山永平寺衆寮箴規』・ここで取り上げている寛元 2 年(1244)の『対大己法』・寛元 4 年(1264)の『日本国越前永平寺知事清規』であって成立年次に従っておらず、寛文版『永平大清規』の配列が何に基づくものかは明らかでない。もし仮に成立年の順に並べたとするならば『対大己法』は 2 番目となるから、展示断簡の「第二」が俄然意味を持ってくる。すなわちこの断簡は道元禅師の自筆であるがゆえに、かつて禅師自身により 7 つの清規が成立順に配列された可能性を物語っているのである。なお道元禅師の筆跡と言われる資料の中には、模写や贋作も多く存するので要注意。

4 金剛頂大王経疏断簡 卷1抄出 伝解脱上人貞慶筆 鎌倉時代写 〔183・7 K 1396196〕

漉き上げたままで打紙加工をしない楮紙(縦25・3糎、横17・2糎)に7行20字程度書写。「笠置解脱上人 義者所」と記し墨印(不能読)を押した極札様の紙片を付すが、古筆家のものでは

ない。虫損は裏打ち補修済み。3行目「是○問」の○部分に省略があり、『金剛頂大王經疏』の全文書写ではない。いかにも学問上の必要に応じて写された仏書らしく、料紙・筆跡共に素朴で飾らないところが魅力である。

伝称筆者貞慶(1155～1213)は平治の乱において非業の最期を遂げた大知識人通憲入道(1106～1160)の孫、解脱房と号し戒律の復興や笠置寺整備に努めた旧仏教の名僧である。断簡は貞慶の筆跡とは認めがたいが、大略同時代の書写と考えられる。なお次の**5三宝感応要略録断簡**と伝称筆者を同じくするけれども、両者別筆。

5 三宝感応要略録断簡 卷下僧宝聚 伝解脱上人貞慶筆 鎌倉時代写

やや粗い漉き上がりの楮紙(縦28・5糎、横6・4糎)3行書写、最終行「集」右下に片仮名「シテ」と記すのは本文と同筆か。初代畠山牛庵(1589～1656)鑑定と思われる極札「解脱上人城域〔牛庵〕」が付属する。内容は卷下僧宝聚第30(慶安版卷下26丁)であり、大正蔵経とは僅か3行の内にいくつもの異同を見る。例示すれば「我像」(断簡1行目)↔「形像」(大正蔵経)、「語時」(断簡2行目)↔「語」(大正蔵経)、「焉」(断簡3行目)↔「矣」(大正蔵経)の如くであり、校勘資料として意味があろう。

遼の僧非濁(?～1063)撰『三宝感応要略録』は天仁3年(1110)以前に渡来し、『法華百座聞書抄』に引用され、『今昔物語集』に大きな影響を与えている。現存諸本中最古の資料は河内金剛寺本(卷上のみ)、完本では寿永3年(1184)写の前田尊経閣本が早い。展示の断簡は嘉禄3年(1227)写の東寺観智院本と拮抗する古さを誇る。伝称筆者解脱上人貞慶については、**第3部4金剛頂大王經疏断簡**参照。

6 孟蘭盆經疏科分 泉涌寺版 折本1冊 鎌倉時代刊

〔183・6 G 10535497〕

丁字吹き紙表紙(縦30・6糎、横10・9糎)中央に「孟蘭盆經疏科文」と外題を墨書。見返し部分から本文が始まり、内題「仏説孟蘭盆經疏科分二 大宋沙門元照録」。上下に単線(転地の間隔26・4糎)を刻し、本文全9折19面。卷末の刊記部分を欠くので刊年不明ながら、版式おほぼおなじくする『孟蘭盆經疏科分』の別版に「建長三年七月孟蘭月 幹縁比丘浄因」の刊記が見え、掲出本も建長3年(1251)頃の出版と推される。帙外題に「仏説孟蘭盆經疏 永仁頃刊 尾欠」と森銑三(1895～1985)の筆にて記されるが、永仁の根拠を確かめていない。刷り鮮明の早印本で料紙も上質だが、惜しいことに虫損あり。愛書家として知られた岡田^{ただし}真(1912～1984)所用「岡田真ノ之蔵書」と古書肆弘文荘所用「月明荘」の朱印を押す。

竺法護訳『仏説孟蘭盆經』に対し唐宗密の注釈『孟蘭盆經疏』が書かれ、さらにその科文を宋元照が作った。科分は科文とも表記し、經疏の文言を段落に分けて趣意を簡明に説くもの。『仏説孟蘭盆經』は日本に広く流布し、特に目連救母の章がよく知られている。

7 如意輪菩薩念誦法 高雄寂靜坊旧蔵 粘葉装1冊

元亨元年(1321)以前写 〔183・7N 1174243〕

藍色無地紙表紙(縦24・3糎、横15・6糎)左肩に「如意輪念誦法」と打ち付け書き外題があり、これは本文と同筆。見返しに「高雄寂靜坊」の朱印を押す。本文料紙は毎半葉7行(界高19

・3 cm、界幅 1・8 cm)の白界を施したやや厚手の斐楮混漉き紙。内題「如意輪菩薩念誦法」。朱の他本校合とヲコト点があり、点は明経点と思われる。

後ろ見返しに「校本云／嘉保二年五月廿三日奉写／請来本之内 願主賢尊」(イ)・「元亨元年九月十一日一交了 性然」(ロ)・「至徳四年八月十九日校点了 道快」(ハ)の奥書があり、(イ)(ハ)は同筆。したがって元亨元年(1321)9月19日に性然がまず校合、次いで至徳4年(1387)8月19日に道快が校合を行った。至徳4年時の対校資料が嘉保2年(1095)5月23日賢尊写本と言うことになる。ここに登場する僧は相当知られた人物で、時代順に記せば、賢尊は『後二条師通記』寛治6年(1092)9月2日条の孔雀経読経僧3人中に見え、同記康和元年5月12日条に「仁和寺阿闍梨賢尊」として登場する。性然は東寺にあつて正和4年(1315)真言院後七日御修法に権少僧都として加わった。道快は康暦元年(1379)11月30日足利義詮13回忌に権僧正として奉仕、至徳元年(1384)12月25日東寺長者、醍醐地蔵院僧正と呼ばれる。至徳4年時44歳であったことを示す資料によれば、康永3年(1344)の生まれ。

少しく虫害を被っているもののほぼ繕い済み。原態のまま伝来して密教研学の一端を語る典籍である。奥書の見られる個所を展示した。

(企画・解題 高田信敬 ご批正をお願いいたします)

